

第104回全国高校野球選手権青森大会



総評

第104回全国高校野球選手権青森大会は、八学光星の3年ぶり11度目の優勝で幕を閉じた。八学光星は今大会5試合中3試合が1点差の接戦。勝つたびに力を付けながら試合の中で得た粘り強さ、勝負強さを発揮して、出場50チームの頂点に上り詰めた。

今大会の勝ち上がりを見ると、春の青森県大会4強がそのまま夏も4強入りした。8強は私立6校、公立2校。近年の傾向通り、私立の強さが目立った。

八学光星は昨秋の県大会で準々決勝敗退、今春の県大会は3位と、現チームは思うような結果を残せていなかったが、夏に照準を合わせた。攻守のバランスが取れたチームに成長。打撃は計43安打26得点と絶好調とはいかなかったが、投手6人がベンチ入りし、継投策を駆使して大崩れしなかった。決勝では全6投手の継投で工大一の猛反撃をかわした。今大会5試合で2失策だった守備も見事だった。

12年ぶりの聖地を目指した工大一は廣野風雅・葛西凜のバッテリーがチームを引っ張った。準決勝では昨秋、今春の県王者青森山田打線を封じ、ロースコアゲームに持ち込んで競り勝った。決勝では15安打6失点だったが、バッテリーの頑張りが終盤の打線の奮起を呼び込んだ。

光星 勝つたびに成長 工大一、バッテリーけん引

今春の東北大会4強で優勝候補に挙げられた青森山田、弘学聖愛は準決勝で敗れた。青森山田は堀内友輔、木村虎鉄、弘学聖愛は葛西侑生、津川凱ら好投手を擁し、共に安定感のある守備が強みのチームだったが、準決勝では重要局面での守りのミスが致命傷となった。

工大一は主戦上野芳輝が2、3回戦で共に1失点完投と底力を見せ、同校初の8強入り。準々決勝を学校事情で辞退したのは惜しかった。ベスト16入りした八学野西、三本木、三沢の十和田地区勢も健闘。むつ地区勢4校は2回戦までに姿を消しただけに、秋の巻き返しが望まれる。

(上村公悟)

光星ナイン喜びの声

○選手は青番

①洗平歩人(3年) 甲子園では先発だったが、中継ぎだった短いイニングを主力で投げた。

②文元龍生(3年) 甲子園では厳しい戦いが待っている捕手として、これまで以上に投手陣との意思疎通を図って守り勝つ。

③高梨克久(3年) 代打の場面は絶対打つという気持ちでスライダースを捉えられた。甲子園でも全員野球で戦いたい。

④奥金恒貴(3年) 優勝できて率直にうれしかった。出場できず悔しかった気持ちを忘れず、甲子園ではスタメンを取りたい。

⑤井坂泰三(3年) 今大会は打撃で貢献できていない分、守備でカバーした。甲子園では攻守で活躍できるように打撃を強化する。

⑥中澤恒貴(2年) 自分に打球が飛んできたら絶対アウトにする。打撃では好機での一本にこだわりたい。全国制覇を目指し。

⑦織笠陽多(3年) 先制点、本塁打と勝利に貢献できた。今まで支えてくれた両親には感謝しかない。甲子園ではもっと頑張る。

⑧佐藤航太(3年) 青森大会では打撃でチームに貢献できなかった。上位打線の一人として、甲子園では出塁を意識する。

⑨野呂洋期(3年) 青森大会では自分の思うような打撃ができず、チームに迷惑をかけた。甲子園ではチームを助ける。

⑩宇田海希(3年) 厳しい戦いの連続だったが、粘って勝つことができた。甲子園でも、持ち味の制球力を生かして戦いたい。

⑪藤原天斗(2年) 目標の甲子園出場を決められてうれしが、出場機会が少なく、悔しさもある。甲子園では本塁打を狙う。

優勝旗や盾を手に、記念写真に納まる八学光星ナイン

